

緑東

緑の風



【緑東中の教育目標】

ふる里を大切に思い、心豊かでたくましく生きる生徒の育成
～自分で考え、他と協力し、共に高め合う人へ～

ご来校・応援ありがとうございました～緑東中文化祭～

11月10日(日)、本校の体育館にて「緑東中文化祭」を開催しました。ご来賓の皆様、ご家族の皆様、地域の皆様には、多数ご来校いただき、生徒への温かな声援や拍手をいただきました。心より感謝申し上げます。
生徒は、これまでに学んだことをそれぞれの学年で工夫して発表しました。どの学年の発表も、緑東中校区や水俣の「人(ひと)」・「物(もの)」・「事(こと)」から学んだことを伝えるものであり、本校の教育目標「ふる里を大切に思い、心豊かでたくましく生きる生徒」を体現していました。
職員一同、力を合わせ、地域とともにある学校をつくっていきます。今後も、本校教育へのご理解とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

久木野地区の「日当野(ひとの)棒踊り」を教えてくださいましたのは、久木野小出身で緑東中の先輩の吉井春水(よしいはるみ)様、そして、棒踊りの歌を歌っていただいたのは、同じく久木野小出身で緑東中の先輩の小野大志(おのひろし)様でした。先輩方のご協力のもと、1年生の皆さんは、難しい動きも覚え、今日は踊りの衣装に身を包み、ステージで見事に踊りを披露してくれました。

「志賀段七踊り」は、宝川内の踊りで、教えてくださいましたのは、宝川内の三保谷里美(みほたにさとみ)様をはじめ、保存会の皆様でした。この踊りでは、フロアを歩きながら、仇である志賀段七を討ち取る話を見事に表現してくれました。

踊りの前に、キャスターやレポーターに扮した皆さんが、VTRで登場し、踊りのいわれや受け継がれた経緯について、説明してくれたので、どんな踊りなのかを分かったうえで見ることができました。VTRを使うことにより、踊りのみに集中できる工夫がなされていました。(校長講評)



1年生「日当野棒踊り・志賀段七踊り」

2年生の皆さんが水俣市のいろいろな職場で実際に仕事を通して学んだことを、なじみのある大喜利スタイルで伝えるというものでした。何といても、大喜利スタイルで学びを伝えるという工夫が素晴らしかったです。私はリハーサルでも大笑いしましたが、今日も笑わせてもらいました。2年生の皆さんの回答には、一人一人の個性があふれていて、納得させられました。

回答は、とぼけていたり、笑いを誘ったりしていましたが、とぼけながらも、また、笑いを誘いながらも、職場体験で感じた仕事の大変さ、家族のありがたみ、これからこんな職業に就きたいなど、体験を通して感じたことや学びがしっかりと伝わりました。

水俣には、それぞれの職場で多くの人々が協力しながら、みんなのために一生懸命働いていることが分かったと思います。ぜひ、この職場体験で感じたこと、学んだことを、将来の自分の姿を描ききっかけにしてください。(校長講評)



2年生「笑点風職場体験」



3年生「Minamata発信」

湯出の七滝、水俣湾に浮かぶ恋路島、石飛の天野製茶園に実際に行って、見たり聞いたり体験したりしたことをもとに、水俣の山と海のすばらしさを伝えてくれました。インターネットなどを使って事前に学習したうえで、現地を訪れ、ガイドの方や天野さんの話を聞くことによって、事前の学びが実感を持って理解できたと思います。発表の姿も立派でした。長いセリフもよく覚え、学んだことをはきはきと、また、堂々と発表していて、「さすが3年生。」と思いました。

ステージの壁面を大きなスクリーンとして使い、写真を映し出すことによって、水俣の自然のすばらしさ、3年生の皆さんの生き生きとした学びの姿、チームワークがよく伝わりました。このような舞台の使い方はとても効果的だと思いました。

皆さんの中には、数か月後には、水俣を離れ、他の市町に進学する人がいるかもしれません。水俣の自然やそこに生きる人たちのことを、中学3年で学んだことには大きな意義がありました。水俣を誇りにしてほしいです。(校長講評)



タブレット型端末の有効活用～理科の研究授業を実施



「生徒が主体となる」＝「生徒が黙って教師の説明を聞くだけではなく、自ら問いを持ち、自分の考えをもとに、友達と対話しながら、問いを解決していく」、そんな授業への転換が求められています。

そして、そのような授業にするためにICT(情報通信技術)の活用、特に、生徒一人一人に配られている「タブレット型端末(いわゆるタブレットパソコン)を効果的に(文房具のように)活用することが求められています。

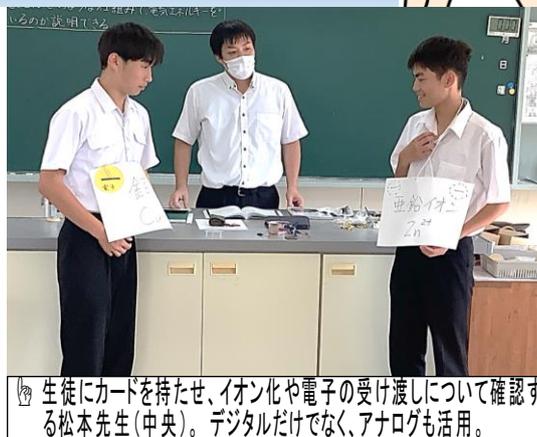
本校では、生徒が日常的にタブレット型端末を授業で使っており、「生徒が主体となる授業」への転換につなげています。

11月6日(水)には、本校の松本 崇寿(たかとし)先生(2年生担任、情報教育担当)が、3年生の理科「化学変化と電池」の研究授業を行いました。その中で、松本先生はタブレット型端末を使い、次のような工夫をしました。

- ① 金属を電解質水溶液に入れたときの化学変化を、図を使って可視化する。(図は、松本先生が、生徒全員に配信。)
- ② 生徒が指でタッチしたら、その図が動くように設定してあり、「どのような化学変化が起き、モーターが回るのか」などについて、図を操作しながら生徒は自分の考えを持つ。(図が動くので、生徒は自然に操作し始める。)
- ③ 生徒一人一人の図の動きを、録画機能を使って自分で録画させる。(何度も再生可能。)
- ④ 生徒は自分の録画を他の生徒に見せ、考えを伝え、対話しながら、「どのような化学変化が起き、モーターが回るのか」などについて、答えを協働して作り上げる。(画面を見せ合うので対話が自然と生まれる。)
- ⑤ 作り上げた答え(録画)を全員で共有(代表の生徒が説明)し、答えを全員で確認する。

難しい問いの解決に向けて意欲的に取り組もうとし、自分の考えを説明したり、友達の説明を実感を伴って理解したり、理解したことを表現したりする、そんな授業でした。「生徒主体の授業になっている。」と感じました。

授業を参観した職員一同、タブレット型端末の有効性について、認識を深めました。今後も、タブレット型端末の活用法など、指導の在り方についての研究を深め、「生徒が主体となる授業」を目指して参ります。



生徒にカードを持たせ、イオン化や電子の受け渡しについて確認する松本先生(中央)。デジタルだけでなく、アナログも活用。



図を操作することにより、化学変化(イオン化や電子の動き)を考える生徒。図の動きは録画機能で録画。



録画した図の動きを見せながら、考えを説明し合う生徒。対話しながら、答えをグループで構築。

